

人の子の肉を食べ、血を飲むとは

ヨハネ福音書6:52-59

【新改訳2017】

- 6:52 それで、ユダヤ人たちは、「この人は、どうやって自分の肉を、私たちに与えて食べさせることができるのか」と互いに激しい議論を始めた。
- 6:53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。
- 6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。
- 6:55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。
- 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。
- 6:57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。
- 6:58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」
- 6:59 これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。

《参照》6:47 まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。

【祈りながら考えよう】

- (1) 53節は、文字通り「肉を食べ血を飲む」ことではないとどうして分かりますか。
- (2) 6章54節と47節を対比して読むと、どういうことが分かりますか。
- (3) 主イエスと私たちキリスト者との間の「密接なきずな」を何に例えて語られましたか。

【解説】

(1) これらの御言葉が語られた背景

当時、ユダヤ教の過越の祭りが近づいており、主の教えを聞いている者の多くは、おそらく過越の祭りに参加するためにエルサレムへ行く途中であった。

主は、ご自身が語りかけておられる人々の心を、まことの過越、罪のためのいけにえとしてのご自身へと向けさせようとしておられた可能性が高いと思われる。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません」(同6:53)

主が語られたみことばに秘められているのは、エジプトの地における最初の過越で、それは、初子が殺された夜に守られた。その夜にほふられた子羊の肉と血は、イスラエル人たちのいのちと安全と解放の手段であった。

それと同じように、主はユダヤ人たちに、ご自分の肉と血が、いのちと、罪人に下される神の怒りからの解放のための手段であることを、悟らせようとして発言されたと思われる。

したがって、ユダヤ人たちの耳には、全く新しいこと、耳慣れないことではなかったに違いない。ユダヤ人たちを驚かせたのは、過越の子羊の肉と血が、彼らの父祖たちにとって体の救いとなったように、ご自分の肉を食べ、ご自分の血を飲むことが、彼らの魂にいのちをもたらす手段であると主が語られたことである。

主が、「ご自分の肉を食べ、ご自分の血を飲むこと」を、魂の救いのためにどうしても必要なことであるとして語られた時、何を意味しておられたのであろうか。この点については、多くの違った見解がある。そのうちの二つを以下に挙げる。

(2) 二つの異なる見解

①文字通り、私たちの体の口で「食べたり飲んだりすること」であるとする

ローマカトリック教会では、この個所で主が語っておられるのは、文字通り、私たちの体の口で「食べたり飲んだりすること」であり、「肉と血」とは、ミサ聖祭で用いられるパンとぶどう酒のことである、と教えている。

「パンとぶどう酒の聖別によって、パンの実体全部が私たちの主キリストのからだの実体に変化し、また、ぶどう酒の実体全部がキリストの血の実体に変化する。…この変化を実体変化と呼ぶ」(カトリック教会の教え/聖体の秘跡/カトリック中央協議会編より)。霊的なことを肉的な物質的なことに曲解する、とんでもない解釈である。

②文字通りの食べることを、意味しているのではない

下記の2つの理由により、主イエスが語っておられる「食べる」と「飲む」とは、文字通りの食べることを、意味しているのではない(ルター、ツウィングリ、カルバン、J・C・ライル、尾山令仁等)。

【第一】には、キリストの体と血を文字通りに「食べたり飲んだりすること」は、すべてのユダヤ人たちにとって全く嫌悪すべきことであり、彼らの律法に繰り返し述べられている教えに全く矛盾することであった。人の子の血はおろか、動物の血であっても、血を飲むことは、旧約の律法が堅く禁じていたことである(創世記9:4、レビ17:10-16、申命記12:16, 23、使徒15:20)。

【第二】には、「食べる」と「飲む」を文字通りにとすることは、人間の魂と救いの間に「体による行い」を置くことになる。このような教えは聖書の中にもない。私たちが「救われるために必要なもの」は、悔い改めと信仰だけである。

ヨハネの福音書では、主が信仰の事柄を、身近な事柄で説明され、それらはすべて霊的なことを示す比喩であるという点で一貫している。例えば、4章では、永遠のいのちのことを、「永遠のいのちへの水」とか、「生ける水」と言っていて、水になぞらえている。

(3) 「人の子の肉を食べ血を飲むこと」は何を意味しているのか

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。」(54節)

「…信じる者は永遠のいのちを持っています。」(47節)

上記のように、6章54節を6章47節と比較すると、「人の子の肉を食べ、その血を飲む」ということは、「主を信じる」という意味であることがはっきり分かる。

「人の子の肉と血」とは、キリストが罪人たちのために死なれた時に、十字架の上でさげられたご自分の体の犠牲のことである。その死によってなされた贖い、私たちの身代わりとして受けられた苦難によってなされた償い、木の上で、私たちの罪の罰を、ご自分の体において担われたことによって有効なものとなった贖罪、これがここで私たちが考えるべき正しい意味である。

「食べる」と「飲む」なしには私たちのうちにいのちはないという時の「食べる」と「飲む」とは、キリストの犠牲を「心」で信仰を持って受け取ることであり、そのことは、救いのために十字架にかけられたキリストを「信じる」時に起こる。それは、内的で霊的な、心の行いであって、体とは何の関係もない。

人が自らの罪責と罪深さを感じてキリストにすがり、キリストの死によって自分のために成し遂げられた贖いに頼るならば、その時ただちに、その人は「人の子の肉を食べ、またその血を飲む」ことになる。その魂は信仰によって、キリストの犠牲によって養われる。



(4) 極めて親密な結びつきが生じる

…わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。

生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです」(55-57節)

主と主を信じる者の間には極めて親密な結びつきが生じる。主の「肉を食べ」、その「血を飲む者」は主の「うちにとどまり」、主もその人のうちにとどまってくる。これほどの近しさや親密さは他にはあり得ない。

私たちが食物を口にすると、自分の存在の中にその食物を摂取する。そして、それが私たちの一部となる。

主イエスを自分の贖い主として心に受け入れる時、私たちも主と一体化され、主の中にとどまる(継続的に住む)。

主はさらに、ご自身とご自身を信じる者の間に存在する密接なきずなを、別の例で説明された。その例とはご自身と父なる神との間の結びつきである。

「生ける父」という表現は、いのちの根源であられる父を意味する。この世に人間として来られたイエスは、「父によって」、御父を存在の理由として生きておられた。主のご生涯は、父なる神とのこの上なく親密な一致と調和の上に成り立っていた。父なる神こそは主のご生涯の中心であり、また周囲との境界線であった。

主が志したのは、父なる神に占有されることであった。主はこの世に人として来られた。しかし、この世は主が肉体をもって現れた神であることに気づかなかった。主は世から誤解を受けたが、主と御父は一つであった。主と御父は限りなく親密な交わりの中におられた。

これこそが、主イエスを信じる者の姿である。信者はこの世に住み、世から誤解を受け、憎まれ、しばしば迫害を受ける。しかし、主イエスに信仰と信頼を置くゆえに、主によって生きる。信じる者のいのちは主のいのちと密接に結合している。そして、このいのちは永遠にまで続く。